光の道を求めて…

封弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
光の道を求めて…

【Ｎコード】
Ｎ０７１５Ｄ

【作者名】
封弥

【あらすじ】
其れは一つの伝説から始まった。『満月の夜に二人で光の道というものを見ると、永遠の幸せを手にする』と言う伝説。青子は其れを本で知り、快斗と幸せになりたいと考える。そんな中一度青子は、組織によって実験台にされそうになった。が、そこで怪盗キッドこと快斗が助ける。その後、青子は伝説のことを話して…

1・・・

そんなものは伝説に過ぎない。

光の道を求めて…　1

青子は一度組織に誘拐され、実験台にされそうになった。
何とか救い出しはしたものの、銃を何発か食らってしまいグライダーを最後の力を振り絞って操作した。

俺の家に行こうとグライダーを飛ばして数分。
黒の組織とか言う奴らは居なかった。

「流石に俺の所には来なかったみたいだな」
「良かった～これで安心して手当てできるね」
「ま、夜も遅いし、ちゃっちゃとやってくれよ」
「はいはい」

窓から家に入り、青子に手際よく手当をして貰う。

「痛くない？」
「あぁ…大丈夫」

時々俺を心配そうにのぞき込んでくる、その顔。
…反則だって、青子。上目遣いとか。
此奴、妙に上目遣いとか上手いしな。
これがまた可愛くて、眼を放してなんて居られない。

…と、そのときだ。

何故かパトカーのサイレンの音が聞こえる。
窓越しにみてみると…

「げ、青子の親父じゃねぇか」
「青子が居ないのを不審に思って調査させたんだ」
「よし、俺の家にも来るはずだ。青子、隠れろ」
「任せて！」

そう言って、十秒もたたないうちに青子は姿を消した。
あれ？こんなに隠れるの上手かったっけ？と考える。
その数秒後。予想していたとおり、俺の家のベルが鳴る。
ヤベ、靴を隠してなかった。と思ったが、玄関に青子の靴はなかった。
流石。隠れるだけ在って靴まで隠すんだな。
と微笑を漏らした俺だが、気を取り直して扉を開ける。

「ん～…どうしたんですか、中森警部」
「あ、すまんな起こしたか？青子、知らないか？」
「いや、みてない」
「そうか…夜分遅くすまなかったな」

そう言って、静かに扉は閉められた。
あれ？中森警部ってあんなに優しい口調だったか？とまたもや考えてしまう。
いつものキッドを捜しているときは、また全然違う。

「行った？」
「あぁ…でも、お前最近親父となんか合ったか？」
「うん…喧嘩したんだ」
「え！？」

「だって…遅く帰ってくること…すぐ怒るんだもん」

…来た。この上目遣い。
如何にも、何とかしてよとでも言いたげなこの上目遣い。

「何とかしてほしいんだろ」
「え！？どうして解ったの！？」
「上目遣いで一発だ」
「ちょ！！！変態！」
「違う！！俺は其れが…」

可愛いとは言えなかった。
青子に何をされるか解らない。

「ふ～ん。可愛いとかまた考えたんじゃないでしょうね」

うわ！！！ばれてる！！！
何処まで此奴は運が良いんだよ！！
予想的中されてるし…。

「上目遣いが…苦手なんだ！！」
「えぇ！？上目遣い苦手なの！？」
「あぁなんか、そう言うのって吃驚するぐらい弱いんだよ」

セーフ。ばれなくて済んだ。
つーか、自分で上目遣いしていることに気がつかないのか！？と思う。
そのとき、青子が何かを思い出したように口を開いた。
「ねぇ…快斗。突然だけど…光の道って在ると思う？」

「あん？在るんじゃないか？」
「これは伝説なんだけど『光の道を見つけたものは、永遠の幸せが訪れる』って書いてあって。それ…一回、快斗と見つけてみたいなって思って」
「ほー。なかなか楽しそうだな」

って俺と見つけてみたい！？誘ってるんですか、貴方と言いたいの必死で堪えた。
でも…永遠の幸せ…か。
此奴…それだけ俺を心配してるのか。

「勿論、快斗が幸せになるんだよ。青子は其れを手伝うの」
「…あ、あぁ」

俺だけが貰うなんて…ちぃと勿体ないな。
やっぱり、二人で幸せになりたいしな。

「快斗は二人と一人どっちが良い？」
「当然二人」
「か…快斗！！」

しまった、口を滑らした。
一人って言おうとしたのに。
よし、言い直しだ。

「すまん、間違えた。一人だ」
「やっぱりそうと思った」

青子の表情が何故か、ふっと緩んだ気がした。

青子…本当は二人が良いんだぜ。俺にとってはな。
嘘だって言うかもしれないけれど、本当なんだ。
どうせ幸せになるなら、青子とが良いんだ。
好きとも言えないこんな俺が言える事じゃないけれど。

だって…女の間でよく言う片思いって奴。
俺はまだその片思いの段階。
青子は俺のことを何とも思っていないだろうけど、俺はその気持ちを持っておくと決めた。

「その伝説…本当に起こったら、俺を連れてくる？」
「勿論。幸せになる張本人が来なくてどうするのよ」
「…お前も幸せになろうぜ」
「えっ…！？」
「一人じゃ…もの足りねぇだろ」

言った！俺言った！！すげーぞ俺！と思ったのも束の間。
青子は首を横に振った。
その瞬間に泪を拭き取ったのが見えた。

「ううん。青子、何時も迷惑かけてるでしょ。其れの罰って奴」

俺が呆然とするのも青子は気にしない。
いつの間にか、青子の頬は涙が伝っていた。
それでも、青子は続ける。

「青子は…罰を受ける側なの。だから…迷惑をかけてしまった快斗に…幸せになってほしいの」
「…出鱈目な」
「え？」

「俺はお前を助けようとしてくれただろ！！何時も何時も、怪我したら心配してくれて…常に青子が俺の傍にいただろ！」
「そうかもしれない…けど…けどね。其れは快斗も同じでしょ。青子がめげてたらマジックで慰めてくれたじゃない。青子が何か在ったら、真っ先に助けてくれた…全て快斗でしょ」

もう、ものが言えなかった。全くその通りのことを言われたから。
小さい頃から、青子がめげてたらマジックで青子の顔に、笑顔が見えるまでずっとやり続けた。
笑顔になってくれたら自然と、俺も笑顔になって。
青子が一時苛めにあったときも俺がその原因の女子を止めた記憶がある。

「……青子」

次の瞬間俺は、青子の体を掻き抱いていた。
青子は呆然としていたが、すぐに状況を把握したらしく口を開いた。

「そんな慰め方法もあったね」
「ちげーよ。後、もう…辛ぇ顔を見せんな。見てる俺が辛くなってくる」
「何処までも優しすぎるんだから…快斗ったら」

くすっと青子の顔から笑みがこぼれた。
涙も消えて、今は笑顔だ。
青子の体を離して、俺も笑みをこぼす。

「良かった、笑顔になって」
「快斗のおかげなんだからね」
「おし。寝るか」

「今日は快斗の家にお泊まりね」
「了解しました」

光の道を青子は求めているのだろうか。
本当は二人で幸せになりたいんじゃないのか。
もう…嘘はつくな、青子。

二人で…見つけようぜ。光の道。

Ｎｅｘｔ→光の道を求めて　２

2・・・

伝説が本当だと良いね…快斗。

2・・・

「ん～…快斗」

「……」

朝。時計はまだ五時三十分。

一寸早かったかな？と想い、もう一度枕に頭を乗せる。

「どうしよう…」

「起きてろよ」

「えぇぇ！？快斗！？」

「ったく。寝たふりにまんまと騙されてやんの」

「ひっどーい！」

「わりぃわりぃ…眠れなくてさ」

「どうしたの？何か、思い詰めてたの？青子、聞いてあげるよ？」

快斗が悩んでるなんて…青子はそんなの認めないよ、と快斗に言う。

「……伝説のこと」

「あぁ。あの、光の道の伝説？」

「それで…そのことが頭から離れなくなっちまって」

「それだけ、気になってたの？」

確かに…気になっていたけれど、寝られないほどまでには行かない。

と、そのとき。何故か私の頭が痛いことに気がつく。
――頭痛って奴よね

「快斗…青子に何かした？」
「いや。何もしてないけど？」
「…頭痛がするの」
「お前さ…組織に連れて行かれたとき、頭殴られただろ？」
「あ。そう言えばそうだった。すっごく痛かったよ、あれ」
「やっぱりな。其れもあるだろうし、お前最近なんか疲れたんだろ」
「そうかも…今日、学校休むね」
「そうしろ。俺もなんか怠いし」
「二人そろって風邪引きね」
「あんまり良くないな、それ」

快斗もやっぱり疲れてるんだよね。
日頃、ずっと仕事に追わされたもんね、快斗。
私も最近どたばたしてたから、なんか疲れがたまった感じだろうな。
快斗がなんの仕事をしているのか…もう知っている。
怪盗キッド…なんでこんな事をやり出したかは、知らないけれど―
何時もご苦労様。

「ご飯作るから、待ってて」
「大丈夫なのか、お前。頭痛してるのに」
「うん。出来る限りでやるから」

そうでもしないと一日中ご飯無しでしょ、と言いたかったが、其れは敢えて言わなかった。
快斗…大丈夫かな。

「あ、そうだ快斗。熱、計っておいたら？」

「そうする」

体温計を取りに行くその足取りが既に危なかった。
本当に…怠そう。
倒れなかったらいいけれど…。

数分後。体温計が音をたてた。一旦、火を止めて快斗の体温計を脇から抜き取った。

「一寸！３８℃在るじゃないの！大丈夫！？」
「あんまり大丈夫じゃないな」
「あんまりじゃ無いでしょ！……もう一寸待ってて。すぐに、ご飯用意するから」
「無茶するなよ」
「解ってるよ。快斗こそ、しっかり寝て？最悪、もう寝ても良いから」

そう言って、また台所と格闘を始める。
ある意味、頭痛と私の対決なんだけれど。

「……よし！出来たよ、快斗」
「頭痛だったのに、良くできたよな」
「ううん。頭痛よりもまずは快斗だよ」
「わりぃな……」

そう言って、快斗は私の作った料理を口に運ぶ。

「やっぱり、お前が作ったもんって上手いよな」
「そうかな？一寸失敗したんだけどな」

快斗…。私の手料理は昔から何度も食べてくれたよね。
不味いはずなのに美味しいって言ってくれて…。
魔法でもかけたの？快斗。
マジックで美味しくするのは難しいだろうし…。

「なぁ。青子」
「何？」
「俺…仕事あんだけど、行って良いか？」
「……駄目！無茶しちゃうでしょ！」
「絶対にか？」
「うん！絶対駄目！！」
「無茶…しねぇからよ」
「それでも駄目だから！！」
「……わーったよ」

口ではそう言ってるものの、顔はそんな感じには見えない。
絶対に…行かないでよ？

「じゃあ、寝るか」
「そだね。寝たら大抵治るよね」
「お休み、青子。早く…治れよ」
「そう言う快斗もね」

瞬く間に睡魔に襲われた私は、昏々と眠りに陥ってしまった。

眠って暫くして、隣に手を置いてみた私。
其処に誰かが居ないことに気がつく。
急いで起きてみたら、快斗が居ない。

「行かないでって言ったのに…」

そう言っても、快斗が居ないのは仕方がない。
でも――何となく寂しいのだ。
お休み、と言う優しい言葉まで掛けてくれたのに、仕事に行ってしまうなんて。

「……っ」

快斗が居ないことを思うと、急に涙がこぼれ出す。

「快斗…帰ってきてよ！青子より風邪、酷かったのに…」

何度も何度も呟いてみたけれど、ただ部屋に響くだけで快斗が現れることはなかった。
もう眠っちゃえと思ったが、なかなか寝付けない。
その間の殆ど―いや全部、泣いていた。
帰ってきてほしい――其ればかりを呟いていた。
涙も、止まると言うことはなかった。

夜十時。ふと、窓が開けられる音が聞こえた。

「か…いと」
「なんだ。泣いてたのかよ。道理で顔赤いと思った」
「勝手に行っておいて『なんだ』は無いでしょ。あ、そうだ。熱、引いたかな」

快斗の額に自分の手を置いてみれば、凄く熱い。
その瞬間、私は快斗に抱きついた。

「どうして？行かないでって言ったのに！！こんなに酷い熱在るのに…！」
「御免…仕事終わらせて帰ってきたら、まさか青子が泣いてるなんて思わなかったから…」
「帰ってきてほしかったんだから！！快斗に…会いたかったんだよ！！」
「御免な。青子」
「解ったら、寝ようよ。もう、無茶したら承知しないんだから」
「既に承知してないだろ。俺、無茶したし」
「……良いからっ」
「うわ！無理矢理寝かすな！アホ子！」
「アホ子ー！？何いってんのバ快斗！」
「……そんなに俺を心配してたのか？」

いきなり真顔で聞かれて一寸吃驚したけれど、当たり前じゃないと答える。

「青子よりも、風邪酷かったのに…どうして無茶したの？」
「絶対に先に済ませておこうって思って」
「……そうなの。そう言う青子まで、快斗みたいに怠くなってきた」

そう言った瞬間。どれどれとか言いながら、快斗は私の額に優しく自分の手を当てた。
一瞬、どきっとした。快斗の手の方が冷たい…。

「お前、相当熱在るな。俺より熱いじゃん」
「…はぁ。青子も根本的に風邪ひいたよね」
「ま、ゆっくり寝りゃあ良いだろ。そういや俺の家に泊まってもう二日かよ」
「ばれたら、お父さんに怒られそうね。どんな言い訳付けたらいい

かな」
「組織に監禁…聞いたら組織の奴らに怒られるな」
「ううん。良いの。快斗が連れて行って言い訳付けたら、何とかなるでしょ」
「…そうかもな。んじゃ」
「え？きゃぁぁ！！」

そう言った瞬間、快斗は私抱き寄せすっぽりと中に収める。
布団の中だし、更に熱のある快斗の腕の中だと…非常に熱い。

「快斗。熱いよ…布団の中だし、熱がある快斗の腕の中じゃ二重じゃない」
「俺が全部吸い取ってやる。お前の風邪も」
「無理なのに…そんなセリフは自分が治ってから」
「お前の分も一緒に治すんだよ」
「ダーメッ！自分で治すの！……でも、暫く快斗の腕の中で寝る」
「…そうか。じゃあ…お休み。青子…俺も良くなんなきゃいけないけど、お前も良くなれよな」
「解った…快斗、お休み」
「お休み、青子」

そう言って、昏々と眠りに落ちた。勿論、快斗の腕の中で。
そんな快斗もすぐに寝てしまった。

空に輝くのは、まだ三日月にもならない細い月。
満月まで…まだ先のことだ。
ゆっくり待てば何とかなるだろう。
待っててよう。満月の日になって、絶対に光の道…見つけよう？

Ｎｅｘｔ→光の道を求めて…　３

2．・・（後書き）

色々設定がおかしい…？

3・・・

3・・・

朝。起きてみれば、俺の腕の中で青子が寝てる。

「こりゃ、起きるの不味いな」

「騙されたね！快斗」

「……俺のネタをパクリやがって！！」

「違うよ！……とにかく、お早う！快斗！あ、そうだ」

また青子は心配そうな顔をして、俺の額にそっと手を置いた。

その顔も微妙に反則。

すんげー可愛い。今この場でまた抱きしめてやりたい。

「熱、引いたね！青子も引いたけど」

「お前も引いたか。どうせ今日は休日だし…工藤ん家に行ってみるか？」

「え？新一君の家？良いよ！青子、電話してみる～」

確か工藤は、つい最近帰ってきたと聞いている。

どうせ、あの小さな名探偵は居なくなったけれど、代わりにでかい探偵が戻ってきたしな。

青子は、ちゃっちゃと電話をすませて俺の元に駆け寄ってくる。

「蘭ちゃんも一緒に居るみたいだよ！行こう、快斗！」

「ふぅ…またあのカップルに会いに行くのかよ」

「提案した快斗がそんなこと言っちゃ駄目！それに、青子達と同じ

幼馴染みなだけだよ！だって新一君の告白、終わってないよ？」
「あ、そうか。そんなもの、あったな。おし！急いでいくぞ！」
「そ…そんなに嬉しい？新一君の家に行けるのって」
「何となく」

いや…さほど嬉しいとは思わないけれど、なんか彼奴面白いじゃんと思うのは俺だけなのか。
青子もすぐに着替えをすませ、家を飛び出す。

「気持ちいい～」
「一日ぶりだな。外は」

家を出て数十分。
工藤家を前にする俺と青子。
と、そのとき窓から髪の長い女の子が…

「青子ちゃーん！快斗くーん！早くおいでよ！」
「うん！一寸待ってね」

そう言って青子は手際よく鍵を開け、行くよと言って俺の手を握り走り出す。
一瞬よろめいた俺だが、すぐに調子を取り戻して走る。

「おー良く来たな。青子ちゃんに黒羽」
「御免ね。いきなりの快斗の提案で」
「良いの良いの。ゆっくりして行ってよ」
「じゃ。御邪魔します！」

家に上がって早々、青子は蘭ちゃんとおしゃべり夢中。
其れもどうかと思うが。

「おい工藤」
「あん？なんだ？」
「お前、ようやく戻れたんだな」
「あぁ。ちびの勉強ばっかりしてて、今の年代の勉強を忘れかけてる」
「あぶねーだろそれ」
「そう言うお前って、よく寝るらしいが？」
「う〝っ…それ…まさか青子から」
「あぁ。電話で行ってたぜ『何時もよく寝るのに、今日はなんか妙に早起きだったよ』ってな」

くっそーあの野郎！！
余計なことまでべらべら喋りやがって！

「あ、そうだ。新一」
「なんだ、蘭」
「今、冷蔵庫どうなってる？足りないなら、みんなで買い物行こうって」
「うん！快斗ー！冷蔵庫ヤバイでしょ！」
「そうとヤバイぜ。買い物、行くか」
「そうだな」

そして、俺は予定外の買い物にまで連れて行かれる羽目に。
でも…久しぶりに工藤の顔を見れたのは良いけれど、小さな名探偵の顔が見られないのも少し名残惜しい気もする。
今日もまた彼奴は新聞に載っていた。事件解決のことが載せられているのは毎度のことだった。

「どうしたの快斗？また怠いの？」

「えっ？あぁ…何でもねぇ」
「快斗くん…昨日熱あったみたいだけど、大丈夫？」
「あぁ…大丈夫だよ」
「ったくよー俺たちでも風邪ひいてないんだから風邪には注意しろよな。特に青子ちゃんを巻き込んだお前はな」

そう言って工藤は俺を睨み付けてくる。
おーこぇー。この視線、怖すぎ。

「なんで、そう俺に限るわけ？」
「お前が一番危ない奴だから」

うーわー、その手ですか。俺が一番危険か…ある意味ね。
店に着き、買い物を終えた後青子は新一君、と工藤を呼んだ。

「なんだ？」
「『光の道伝説』って知ってる？」
「蘭から聞いたから、一応は知ってる」
「満月まで後何日？」
「まさか、あんなの本気にしてるのか？」
「新一ー。そう言うのは試してみるものだよ？」
「そうだぜ、工藤。伝説って言うのは信じたくなくても、一度は試すもんだ。因みに満月まで残り二週間一寸だ」
「あ、快斗有難う！」

そう言ってまた、蘭ちゃんと話し出す。

俺は、何時青子が何に合うか解らないと思いずっと青子を傍から見守っている。
そう。後ろからストーカーされているからだ。

それに気がつき俺は呟く。

「後ろ１００メートルぐらいかな。俺等、ストーカーされてんぜ」
「やっぱり、そうと思ったぜ。何時、蘭と青子ちゃんに危険があるかわからねぇから。傍にいてやらねぇと。それか…」
「付けられていることを言うか、だな」

でも…こう言うのは言わない方が良いんだろうな。かえって焦らせてしまう。
青子と蘭ちゃんを、なんとしてでも守り抜かないと。工藤もきっと同じ事を思っているはずだからな。
青子…彼奴が居なくなれば、何時も口喧嘩できるほど何でも話せたのにその青子が居なくなれば、辛いも何も絶望してしまうかもしれない。
…どうして俺はこんなに青子を気にして居るんだ。何時も軽く見ていただけだったのに…。

「快斗」
「なんだ、青子」
「怖いよ…ストーカーされてるよ…快斗ぉ！！」

青子は後ろを振り向いて、俺の方に駆け寄ってきて俺にしがみつく。

「青子も気がついてたか…」
「青子、知ってるんだからね。小さい頃『俺がお前を守ってやるから』って言ったの」
「わーってる。俺がいまでもお前を守ろうって思ってるの、知らなかったのか」
「知ってたよ。だから…青子も守ってやらないと、って想って」
「「お前は俺を守り抜く自信はあるのか」」

工藤と言うことが被った。
しかし、其れを言った瞬間、青子と蘭ちゃんは固まる。俺達が仕事中に死んだらどうするんだ、と言う話だ。
それは工藤も同じだった。工藤は何度も命を狙われたことがある。
そう言う俺も怪盗キッドだから、狙われるのは当然。
だから、何時も行けない青子と蘭ちゃんは守り抜く自信があるのか、と言うこと。

「……そうだよね。新一を守り抜けるわけ無いよね」
「青子も…快斗の仕事を笑顔で送っててあげれればいいよね」
「え…蘭？」
「青子？」
「「もう知らないんだから！！！」」

二人はほぼ同時に言い、俺たちから離れていった。
これが後で大変なことになると言うのも知らずに…。

「言い過ぎたのか？」
「いや…これで良いんだと想う。蘭も青子ちゃんも気分を悪くしたんだろうけど、命を狙われている身にもなってよく考えろって意味だ」
「…なんだか、辛くなってきた」
「正直、俺もあんなに言って良かったのかわからねぇ。蘭や青子ちゃんがどれだけ傷ついたか…あんな事言ったけど、若干言い過ぎたとは想っている」
「これからどうすんだ？青子と蘭ちゃん、探すのか？」
「探すしか…ん？」

突然、工藤の携帯が鳴り出す。

「え！？ら…蘭！？」

俺も一瞬吃驚した。一体何があったのだろうか、と。

「もしも…」

『新一！助けて！！なんか、黒い帽子を被って、一人は金髪で髪が長くて、もう一人も黒い帽子を被って、サングラスを掛けてるの！其れの人たちに私と青子ちゃん…捕まっちゃったの！！！助けて！』

「わ…解った！一寸待ってろ！！」

そう言って、静かに電話を切ると同時に、俺の携帯も鳴る。

「青子？」

『快斗ぉぉ！！助けてよ！前と同じ奴に捕まってるの！！蘭ちゃんと離れたのよ！！それでもうすぐ、実験が始まるのよ！！本当に、お願い！！！』

「解った。少し、時間くれよ」

『快斗…信じてるからね』

そう言って青子から電話を切った。

「なぁ…工藤。蘭ちゃんと青子を誘拐した奴って」

「まさしく…」

「『黒ずくめの男』だな」

「ったく…まだいやがったか」

「急がねぇと！蘭ちゃんも青子も実験台にされる！」

「あぁ…出来る限りで行かないと！！」

そう言って走り出したところに、クールな声が一寸と俺たちを呼び

止めた。

「何処に行く気」

「み…宮野！！」

「何処に行くつもりなのかを聞いているのよ。答えて、工藤君」

「……黒の組織」

「…危険よ。今、実験中で」

「知ってる。でも、このままじゃ蘭と青子ちゃんが実験台にされてしまうんだ！だから、行かせろ！」

「じゃあ、私も行く」

「どうして…」

「私が生け贄になるのも可能でしょ。逃げ出した罪が此処にでるのよ」

「来ない方が良いぜ」

「黒羽君貴方まで…」

「何がどうなっているのか、イマイチわかんねぇけど、工藤は決着を付けたいんだ。薬を飲ませて、江戸川コナンとなったあの日の復讐みたいなものだ」

「黒羽。お前はどこから何処までを知っている」

「さぁ。これ位しかしらねぇぜ」

「とにかく、私も着いていくから」

しゃーねーな、と工藤は参ったように言い3人で組織へ向かうことに。

青子…待ってろ。何が何でも、お前を守り抜くと言った俺だから必ず救ってやらねぇと。

二度同じ手は通じないけれどキッドで行く方がまだマシ。

「工藤。一寸トイレ行ってくるから、先行っててくれ」

「解った」

御免な、工藤。こんな事をしても…悪く想うなよ。

4・・・

闇に包まれている実験室。
前と同じ男に誘拐されてしまった私。
本当に…情けない気がしてならないよ…。
二度同じ手は通用しないってよく言うけど、通じてるじゃない。
私は何処まで馬鹿なの…。

それにしても、何で快斗に向かってあんな事を言ったんだろう…。
何時も笑顔で見送って無いじゃない。
大抵は行かないで、と言って泣いていた。
でも、行ってしまうよね。
必ず帰ってくるから、って言う台詞を残して。
私は信じてた。絶対に帰ってくる、と。
快斗はちゃんと帰ってきてくれたから…これからも大丈夫だと――。
私は何の所為であんなに怒ったのだろう。
蘭ちゃんに便乗したわけでもない。
確かに、快斗の仕事を笑顔で見送ったことはない。
でも…でも。それだけでこんなにも怒る自分が居るなんて。

「そこの…女」
「何よ」
「こっちへ来い」

なにするのよ、と怒りを含めて昨期からガチャガチャと何かしている人に向かって問う。
実験するのだと男も返す。

「断ります！」
「来いと言ったら来い！」
「絶対に嫌よ！！実験台にされるなんて真っ平御免よ！」
「なら無理矢理にでも…」
「無理矢理でも嫌だから！ちゃんと快斗が来てくれるもん！」
「…助けが来れるような場所ではない。窓すら…くっ。一つだけあったな」
「絶対に助けに来る！もしも、来ないのなら自力で脱出する！」
「出来るならやってみな」

そう言って、また実験器具がたくさんある方向を向いてガチャガチャやり始めた。

そこで吃驚したことがあった。
私がふと、視線を天井に向けたとき何かが音もなく舞い降りて、天井のすっぽりと開いた穴から私が出て行くのが解った。
そしてその穴から大分離れ、更に地上に出て其処のベンチに降りる。
降りたとき、誰だと想って顔を見てみたら…昨期から助けてほしいと願った

「快斗…」
「お待たせ、青子」

その言葉が胸に染みて、涙があふれ出す。
やっぱり、快斗は来てくれるのだと。
快斗は、私にハンカチを差し出す。
涙声で有難うと言い、涙を必死に拭う。

「…御免な」

急に謝罪の言葉が聞こえ、どうして？と聞き返す。

「何時もお前、俺がキッドとして何か盗みに行く時に、決まって『行かないで』って言ったじゃん…なのに其れを振り切って仕事に行く俺が最悪だなって…」

「青子こそ、いつも『行ってらっしゃい』って笑顔で見送れないじゃん？其れが、嫌で。何時も泣いてばかりだから…」

「お前が謝る必要はないって。あ、そうだ。お前、怪我してないか？」

「うーん…縄で縛られたときに、足を縄で切った以外は何にもなかったよ？」

「…足見せてみろ」

そう言われたので従順に足を見せる。

其処には、縄で縛られた跡から血が滲み出ている。

暫くその傷を見つめていた快斗だが、次の瞬間バンダナみたいなのを取りだして、其処にきつくないように巻く。

「…きつくないか？」

「うん。大丈夫。ありがと、快斗」

「べ…別に」

そう言ってそっぽを向いた、快斗こと怪盗キッド。

何時も何時も御免ね。助けてもらってばかりで…。

私は何もしてあげられないなんてね…。

そっぽを向いた快斗の顔に微笑みを向ける。

「ねぇ快斗」

「あ？どした青子」

「どうして…キッドで来たの？」

「あぁ、これの方がぶっちゃけ助けるには簡単な方だから…かな。そのまま助けに行くときっと俺、生きてないぜ」
「…そのままで更に無傷だったら青子は褒めたあげたけどなっ」
「なーんだと！？」
「嘘嘘。キッドでも助けてくれたから超嬉しかったよ。実験台にされる寸前だったもん」

私の推定では、実験台にされるついでに殺されるような気がする。そんなの真っ平御免だ。

「青子は、信じてたんだよ。快斗が絶対に来てくれるって。例え、どんなに最悪な手段でも来てくれるって」
「…お前が攫われて行かない奴が何処にいる」
「本当に有難うね。何時も何時も」
「あぁ。お前も、仕事を応援してくれてるみたいだし。お相子だなっ」
「うん」

そう言って笑う私たち。快斗の笑顔は見ていたら、誰でも幸せになる。
そんなぐらい、最高の笑顔だった。

「…あ、今更気がついたけど青子。お前、頬の所」
「えっ？」

そう言って触ってみれば、痛みが走る。

「何で切ったんだろ…結構痛いし」
「…よし！俺の家に行くぞ！」

そう言うと、有無を言わさず抱き上げられグライダーが大空を舞った。
そんな快斗が私を抱く力はいつもより強かった。
それだけ…私を大事にしてくれているの？

「って一寸待って。私を助けてくれたのは良いけれど、新一君は？」
「あぁ。彼奴は蘭ちゃんを助けに向かったよ？なんか、宮野も一緒らしいけど」
「宮野？もしかして、宮野志保さん？」
「あぁ。彼奴も途中で合流したらしく工藤と一緒に…」

行ったんだ、と言おうとしたところで快斗の携帯が鳴る。
げっ、工藤からじゃんと顔を蒼くする。

「もしもし、くど…」
『黒羽ー！！！テメー！よくも嘘つきやがったな！』
「ち…違うっての！俺はお前らを見失ったから、先に青子を助けたんだよっ！」
『…しゃーねー奴。今、何処にいるんだ？こっちも、蘭を助けたから。宮野は、組織に入った途端姿を消したけどな。一寸組織と話してくるなんてぬかしやがってな』
「そうか。んで、場所はポプラの木の下のベンチって言って解るか？工藤」
『わーった。今行く』

そんな会話が私が聞いている限りで解った。
快斗はきっと何らかの理由を付けて、私を助けに来てくれたんだよね。

「マズイ！この服装じゃ彼奴らにばれる！」

「ホントだ！急がないと！」
「ふん。こう言うときこそマジックというものがあるのさ！」
そう言って快斗は指を鳴らす。白い煙に快斗が包まれる。
そんな煙も瞬く間に晴れた。そして、其処に立っていた快斗の姿は…
「どーだ！昨期の服に戻れたぞ！」
「すごっ！マジで戻ってる！」
そう。昨期見たときと同じ服装に戻っている。
このマジックはなかなか凄いな、と正直感心してしまった。
「おーい！黒羽ー！青子ちゃん！」
「青子ちゃんー！黒羽くーん！」
「快斗、来たみたいだね」
「ふぅ。危なかったぜ」
「ったく、テメー！マジで許さねぇ！」
「御免ね、黒羽君。新一ったら昨期から『黒羽のヤロー！』ってずっと言ってるんだよ」
「ううん。構わないよ。工藤っていっつも、こんな感じだからな」
「あぁ！？黒羽くん？今、なんて言ったのか、俺にもっとわかりやすく説明してくれるかなぁ？」
「ん？つまりね、工藤はいっつも、俺に文句を言うような奴だってことよ、解ったか？」
んにゃろー！！と新一君は、快斗に飛びつく。
一方の私と蘭ちゃんは呆然とその目の前の光景を見ていた。
「蘭ちゃん。新一君ってこんなに荒れてた？」
「ううん、全然。黒羽君こそ、新一をからかうのそんなに好きだっ

け？」
「うん。だって、新一君の所に行くのに『何か面白そうじゃん』って言ってたよ？快斗」
「だから、こうなる訳ね」
「だね」

私たちは納得したが、目の前で暴れ倒している二人は全く納得しない。

空には上弦の月。残り一週間。
それまで…待ってるよ、私は。
空を見上げながら、そんなことを想った私だった。

4・・・（後書き）

いろいろとおかしいかもね（笑）

5．・・（前書き）

自分で勝手に設定した部分もあります。
そこら辺はご了承下さい。

5・・・

あれから家に戻った私たちは、疲れの余りすぐに寝てしまった。
今更私が自分の家に戻ったところで、お父さんに怒られることは間違いなし。
そう想った私は、またもや快斗の家で寝ている。

快斗も、帰ってくるなり布団に沈んだ。
マジで疲れた、と布団に入りながら言ってた。

私を必死になって助けてくれたから、疲れたんだよね。
…私の所為だ。此処まで疲れさせているなんて…。
自分で脱出しなかったから…助けを待つだけだったから…。
何処まで無力なんだろう。

眠られなかった。そんな自分を責める想いだけが自分の胸を締めて…
また、涙があふれ出す。

無力な自分が呆れてしまう。
そんな時、私の手を握る私より大きい手。
そしてその手の持ち主は私に向かって、喋りかけた。

「馬鹿…何泣いてるんだよ青子」
「だって……」

そう言ってつい昨期想っていたことを全て話した。
自分では何も出来ない。私の所為で快斗は疲れたのだろう、と。

必死に助けてくれて、疲れたって言ったのではないだろうか。
何で自分で脱出しなかったのだろうと。
そんな自分を責める想いだけが、心の中を締め付けた。
快斗は、突っ込みも何もいれずに静かに聞いていた、
そして、喋り終えた後快斗は寝ている向きを変え、私と向かい合わせになった。

「そんな事で責めるな。俺はお前の所為で疲れたんじゃない。前からのストレスって奴だから。気にするな、青子」
「……ご…めん…」

そう言って、快斗の前でずっと泣いていた。
しかも、私がどんどん辛くなって、快斗を困らせるだけだと分かって。

「青子。お前は泣かなくたって良い。先ずは落ち着け」

また、そんな言葉が聞こえ必死に涙を拭う。
でも涙が止まることはなかった。

「何か…分からないけ…れど、止まんない」
「……仕方ねぇな」

そう言って私の腕を引き、抱きしめられる。
これ位しか、方法はねぇんだと情けない声が飛ぶ。
どんな顔をして言ってるのだろうと思って上を見てみる。
しかし、その顔にいつもの強気の顔はなく頼りなげな顔があった。
快斗まで…何らかの原因で傷ついたんだ。
此処まで青子が快斗を困らせたんだ。其れがきっと原因だ。

「そんな快斗。初めて見た」
「俺も弱いときは、弱いんだ。お前と二人で居るとき、凄く弱くなる」
「…そっか。きっと青子も弱いんだ。快斗の笑顔なんかに、其れから抱きしめられるとか」
「俺はお前の無邪気な笑顔と、泣いてるとき。泣いてる時、つい俺まで悲しくなるんだ」

泣いているときは慰め方法が分からないんだ、と寂しげな笑みを見せて快斗は言った。
お前なら、と思ってやったのがこれしかなかった。他に方法が見つからなかったのだと。
御免なこんな俺で、と私を胸に抱きながら快斗は呟いた。

「快斗は…何も悪くなんかない。快斗を此処までに困らせている…青子だよ」
「青子」
「自分で勝手に拗ねて、快斗を困らせて挙げ句の果てにこうされるだけ終わるなんて」
「…もう、これ以上言うな。自分を締め付けるな」

何故だか、私を抱く力が強くなった気がした。
そして、快斗はもう一度自分をもう締め付けるなと言った。

「お、そろそろ起きねぇと学校に間に合わねぇぞ？…青子…？」
「…うん」

快斗は私を放し、着替えを始める。
凄く虚ろだった。しかも、針の穴ぐらいしかないけれど、其れだけの傷が心に付いた。

私も着替えをすませ、朝食を済ませる。

「じゃあ、行こ？快斗」

「おう！」

私は無理矢理にでも明るく振る舞って、快斗を安心させたかった。
無理矢理なんて卑怯だけど、其れしか私の頭には浮かばなかった。

学校に着いたとき、怠さを覚えた。
どうしよう、このまま引き返しちゃ駄目だしと想って我慢することにした。

「青子～！」

「あ、恵子！」

「熱だって聞いたけど、もう治ったの？」

「うん！もうバッチリ！」

「よかった！みんな、結構心配してたよ？『青子は風邪を引くような子じゃないのにね』ってね」

「青子も吃驚したよ。今まで風邪なんて滅多に罹らなかったのに…と想ってさ」

「ホント私も吃驚したよ。あ、そろそろ授業だね。行こう！」

「うん！」

そう言って、走って教室へと戻った。
授業中、怠さの所為か頭がぼーっとした。
答えられるはずの問題も解けなくて、先生に大丈夫か？と言われたが大丈夫ですと授業を続けた。

休み時間階段を下り始めた時、更に怠さを覚え体がふらついた。
だが、支える物もなかったため、そのまま落ちるしかなかった。

「青子！！」

快斗の声が聞こえた気がした。階段の一番下に落ちるまでのこり数秒。

でも、それに快斗は間に合った。

「しっかりしろ！青子！」

「快斗…」

「青子！！」

恵子も快斗の声で気がついたのか、急いで階段の下に降りてくる。

そして、降りてくる成り私の額に手を当てた。

「ちょっと熱が有るじゃない！治ったんじゃなかったの！？」

「治ったと想ったけど…青子の勘違いだったのかな」

力もなく私は笑った。とにかく保健室に行ってきなよと恵子にいわれ快斗と共に保健室へと向かった。

保健室に向かっているとき、快斗が青子と呼んだ。私も何？と返答する。

「お前、無理矢理笑ったりしてたろ」

「えっ？」

「俺を安心させようと想って、怠さも我慢して笑ってただろって」

「……どうして、快斗は分かるの」

自分が快斗に迷惑をかけないために、怠さを覚えたにも関わらず無茶をしたと言うことを。

すると快斗は笑って、俺は、お前を何年見てきてると思ってるんだ

と言った。
保健室について熱を測れば、３７．８℃。
うわ。こりゃ熱だと想った。
とにかくベットで寝て、休憩を取ろうと想った。
快斗は担任に頼んで、私の看病に当たってくれた。
快斗は私が寝ている隣でずっと居てくれる。

「俺の前で無茶するなんて、やっぱりアホ子だ」
「アホ子じゃないって。それだったら快斗もバ快斗だよ」
「アホも馬鹿も同じか」
「そうかもね」

笑いたいのに…怠さで笑おうにも笑えない。
そんな自分に無性に腹が立った。

「珍しいな。いつもなら怒鳴り倒してるのに」
「そんな体力…ないよ」
「お前、相当無茶したみたいだな。授業の時に分かった」

お前がすらすら解けるはずの問題が、全然解けてないことに気がついたと。
それに怠そうにしてたからなと笑う。
もう、何もかもお見通しだったんだ。
私がどれだけ無理矢理明るく振る舞っていても、無茶をしているとお見通しだったんだ。

「御免…」

自然と謝罪の言葉が出てきた。何時言おうか迷っていた所だった。

快斗は淡く笑い、謝る必要なんてねぇからと言う。
お前が無茶してたのは最初から分かってたと。
快斗の指が髪を滑る。本気でお前を慰める時ってどうすればいいと聞いてくる。
「青子にも分からない。でも、快斗が笑顔ならそれだけで安堵できる」
「そうか。――なぁ青子」
「ん？」
俺は何に支えられて生きてきたんだ？と私に聞いてくる。
また、あの頼りなげな顔だった。
私は上半身を起こし、快斗に言った。
「快斗は、快斗のお父さんに支えられて生きてきたんじゃない」
今はいなくたって、息子を大切に思ってくれているのよと言葉が出た。
すると快斗は、父さんもそうかもしれないけどと言って私を見た。
「お前が一番の支えだったのかもしれないな」
「え？」
「何時もお前は俺を心配してくれてたし、一番俺を安心させてくれんのがお前だった」
私はまた、泣きそうになったからそっぽを向いた。
快斗は瞬時に其れを悟ったのか、ハンカチを差し出す。
「もうパターンは分かってる。お前、泣いてるだろ」

私は答える代わりに、熱を帯びた体で隣の快斗にしがみつく。
御免、と何度も何度も言った。
私は、元から全てが弱かったのかもしれない。

「もう。俺の前で強がらなくたって…良いからよ。弱くなったって良い」

有りの侭のお前で居ろ、とその言葉が耳朶を掠める。
もう快斗の前で強がるのは終わりなのか、と正直に想う。
でも、またアホ子だとかバ快斗だとか言い合いたい。

「でもね…快斗。私は、また言い合いたいんだ。『アホ子』『バ快斗』って」
「其れは強気で言ってる訳じゃねぇだろ？日常的な会話じゃん」
「そうね。……じゃあ、暫く寝るね。本気で怠くなってきた」
「おう。俺も暫くは此処にいるから何かあったら言え」

分かったと言って、眠りにつく。
快斗、何時も何時も御免ね。私の所為で、快斗が困ってるって言うのは知ってる。

快斗は、キッドをやってて何人も傷つけてきた。
現に私だってキッドの攻撃を喰らったことは一回だけある。
その時は、呆然とした。快斗が私を攻撃したこと自体が予想外だった。
多分、快斗も呆然としただろう。何で青子を攻撃してるんだと。
その次の日、快斗は欠席していた。
風邪だと言っていたが、絶対に違うと想って怪我をしている状態で快斗の見舞いに行った記憶がある。

そのときは快斗に御免と何度も謝られたっけ。
青子は謝られること…何もしてないのに。
想うだけで辛くなってくる。快斗のハンカチを握りしめたまま、泣いた。
快斗の名前を涙声で幾度も呼んだ。

「……青子」

また泣いてるのか、と最悪な言葉だったけど、優しい言葉にも聞こえた。
何で此処まで泣き虫なんだろう、私は。自分が、凄く情けなく想えた。
何処まで迷惑をかけたら気が済むのだろうと。
保健室のシーツに涙の染みがいくつも出来ていく。
其れが私の、心の傷のようにも見えていた。

6・・・

青子は、結局熱が下がらずに早退したらしい。
俺は途中で寝てしまって、分からなかったが。
でも、俺のハンカチの上に紙が乗せてあった。其処には青子の字で
「ありがとう」と書いてあった。

放課後。俺は一旦青子の家に寄った。幸い、あの警部は居なくてほっとしたが。
青子は熱が少しずつ下がってきているらしい。
そのとき青子はそうだと思いだしたかのように俺に喋りかけた。

「そう言えば快斗。最近青子の家に予告状なんて持ってきた？」
「いいや。持ってきてないけれど…」
「じゃあ、おかしいな。怪盗キッドって書いてあるよ。この予告状」

俺は、その手紙を手に取る。確かに怪盗キッドと書いてある。

「今宵、貴方を奪いに行きます……怪盗キッド」
「出した覚えはある？」
「全然。まず俺、予告状なんて書いてもない」
「じゃあ…もしかして」
「あぁ…もしかしなくたって」

『怪盗キッドの偽物』

「貴方を奪いに……って青子じゃねぇのかっ！？」
「そうかもしれないね。青子って狙われやすいもん」
「自慢話じゃねぇよ！！これって危険事態じゃねぇか！」

「うん…分かっている。でも、もしかして…もしかしてだよ？怪盗キッドを偽物で誘き寄せてそこで捕まえるって作戦なんじゃないの？」
「はん！この俺が捕まるとでも想ってるのか？」
「まさか！快斗が捕まるわけ無いじゃん！通称バ快斗だけど。凄く賢いしね」
「バ快斗だとゴラ！！んならお前はアホ子だ！！」
「なんですって！！快斗よりは賢いわよ！！」

そう言って俺に飛びついてくる。
良かった…想ったより元気だ。

「青子。お前にどんな危険が迫っても、絶対に守ってやるから」
「やっぱり快斗はその台詞だよね。そう言って大抵は守ってくれたから信じられるけど」
「あぁ？天下の大怪盗でもあってお前の幼馴染みの俺がお前を守り切れねぇってか？」
「天下の大怪盗はどうでもいい気がするけど」
「はぁ！？其処が一番大事だってのに！！」
「ばれたら終わりじゃない。あ、そう言えば何で青子に姿明かしたの？みんなは知らないのに…」
「え…」

…言えない。
いつか、青子に告白しようと想って姿を明かしたなんて言えない。

「幼馴染みだから？」
「まぁ…そうだな」
「でも、紅子ちゃんは知っているっぽいよね」
「あぁ。彼奴は元から知ってる。しかも俺に好意を寄せてるっぽい

しな」
「そうなんだ。快斗、紅子ちゃんと一緒になれば？」
「え？」
「青子は別に快斗のこと、好きって訳じゃないもん。只幼馴染みって想ってるだけ」
「そうか…」

俺は青子の言葉で少しだけ落胆した。
俺の好意は無駄なのかもしれないと少しばかり想った。
でも、告白するって決めた。決めたことは実行するのが俺。
でも…そう簡単にできない。
一長一短っぽいなこれ。

「なぁ青子」
「ん？」
「もしも…もしもだぞ？俺が『青子のこと好きだ』って言ったらどうする？」
「うーん…『もしかしたら、青子も好きかな』って言ってみるかな？」
「サンキュ。大丈夫だ、別にお前が好きって訳じゃねぇから」
「そうよね。青子もまた相手探すか…」

そう言って、青子は一つ溜息。

「あー叫びすぎて頭痛してきた。頭痛薬飲んでくる」
「俺が取ってくる。お前は寝てろ。一応病人だろ？」
「御免ね快斗。やっぱり快斗って……いや、何でもないよ」

その後の台詞を聞きたかったと想う俺。
でも今聞いたところで何になるんだと振り切り頭痛薬を取ってくる。

青子に頭痛薬を手渡し、隣に腰掛ける。
「はぁ…久々に叫びすぎたね、青子。自分が馬鹿馬鹿しいよ」
そう言って頭痛薬と水を飲み青子は、ベットへと寝ころんだ。
疲れたと只一言呟いて。

「快斗は…どうして怪盗を引き継いだの？」
「親父の跡継ぎぐらいしたかったし…。そんなところ」
「そっか…。青子はどうしよう…将来キッドを追う羽目になるのかな…。そんなの嫌！快斗を捕まえるなんて…できっこない」
「お前は大丈夫だ。進むべき道が其処にあるんだろ？」
「将来がどうなるかだなんて、予想できないしね」

そう言って力なく青子は笑う。

「満月まで…後、二日か…。どうなるだろ」
「さぁ。試そうって言ったの青子だろ？」
「うん。…蘭ちゃんの所もきっと試すんだろうな…ふふっ。どうなるかホント楽しみだな…って快斗！予告時間まで時間ないよ！」
「うわっ！って言っても無駄だし家で待機するか。下手して外に出れば大変なことになりそうだ」
「キッドのことになると、お父さん飛びつくからね」
「あの警部に会うのだけは御免だ」

そう言って、笑った。腹の底から笑った。
青子も昨期は力がなかったのに、思いっきり笑っていた。

「はぁ…ホント有難う快斗。見舞いまでしてくれて…あーあ！青子ったら迷惑かけすぎ！」

「気にすんじゃねぇってんだろ！俺は別に迷惑もくそも何にも思っていねぇから！」
「そう？なら良いけど。……偽キッドって誰だろう…。新一君じゃないし…」
「彼奴も確かグライダー使えるらしいけどな。…ま、キッドを捕まえるための策略を立てる人物と言えば…」
「…お父さん」
「だなっ。俺は別に予告状も何にも書いてねぇっつーの。ましてや、青子を奪うなんて以ての外だ！」
「ホント！青子が連れて行かれたら、青子も承知しない！」
「俺だって承知しねーぞ！！絶対、青子は渡さん！」
「可笑しいね、青子達。凄く似てるっ」
「幼馴染みは此処まで似るのか！？うわー」
「何がうわーなのよ！幼馴染みなんだから仕方ないじゃない！」

と、そう言った後時計を見てみると予告時間をとうに過ぎていた。
様子、見に行ってみるか？と誘ってみる。

「どうしようかな…一寸怠いけど、青子が帰ってきたことはお父さん知らないし、行こう！」
「そうだな！偶然通りかかったっていう風にも出来るしな」

青子には着替えてもらうように言っておいた。
素早く青子も着替えて、俺の所へ戻ってきた（流石に覗くほど俺は変態じゃない）

「偽キッドってどんなんだろ…。誰か変装してるのかな」
「さぁ知らね。見てからのお楽しみだな」

外に出てみたら、丁度あの例の警部が戻ってきているところだった。

「お！青子は無事だー！」
青子を見る成り、そう叫んだ中森警部。
だって、本物のキッドはこの俺なんだから。
「キッド、来なかったんですか」
「あぁ。予告時間を過ぎても現れやしない。大丈夫かとこっち見に来たんだ」
「青子は何にもされてないから大丈夫だよ！」
「なら大丈夫だな！よーし！撤収だ！」
偉く上機嫌だなと思いつつ、俺は青子と共にまた道を歩いていた。
「寒っ…」
「やっぱ怠さで寒さに耐えるの、きついか？」
「うん、一寸ね。もう一寸着込んできたら良かった。一応三枚ぐらい着込んで…え？」
青子の言葉が跡切れたのは、俺が自分の着ていた上着を青子に着せたから。
少しでも暖まれば嬉しいけれど、と一言付け足す。
「そんな！快斗こそ寒いんじゃないの？」
「俺は平気。別に寒くないから」
「御免ね快斗！これで風邪引いたら青子、責任とるから！」
「…賭でもするのか、オイ」
「しませーん！！」
「…ちぇっ」
「『ちぇっ』じゃないの！子供は賭しちゃ駄目なんだから！！」

「へいへい…」
「…あっ」

雪だと青子は空を見上げる。
つられて俺も空を仰ぐ。空からゆっくりと舞い落ちてくる雪は何処か儚げだった。
暫く雪に見とれていた俺達。
だがやはり青子に上着を貸した所為なのか、寒さに襲われていた。

「さみぃ…」
「ほらやっぱり！快斗寒いんじゃない！…寒いなら…これあげる」

そう言って俺に渡されたのは、何処から用意したのか一つの紙袋。
何だこれと俺は拍子抜けたような声を上げた。

「…見たら分かるよ」
「そうか…」

言われたとおり俺は紙袋を開けて中身を見る。
その中身のものに俺は驚愕した。

「…御免ね、下手で。二年前からずっと作ってきたものだけど…今になってようやく完成したんだ」

中には、白い毛糸で編まれたマフラーがあった。
しかも青子は下手だと言っているが、失敗しているところは一つもない。

「ありがと、青子。暖まるよこれ」

首に巻いてみたところで、温もりが伝わってきた。
青子も良かったと嬉しそうな顔をする。

「これで暖まってくれたら嬉しいな…。快斗には色々お世話になったしね！青子からのお礼の品ってやつ？」
「きっと暖まる。サンキューな青子。ホント、助かった」
「ううん、大丈夫！快斗のためだもん。……あ、今日どうしよう。快斗の家に泊まり込みは不味いよね」
「そろそろ家に戻るか？」
「そうだね…。泊まり込みすると快斗が危険行為とかしそう！」
「あぁ！？したいのは山々だけど病人相手にそんな事出来るかよ馬鹿！！」
「あっら珍しい。いつもなら押し倒して色んな事するような人なのにね？」
「な！？」

その言葉を最後に俺たちは吹き出す。
本当に、嬉しかった。青子の顔に笑顔が戻ったんだと思うと。
とその時青子の携帯が音を立てて鳴った。

青子は、分かったとか、ＯＫとか色々言った後電話を切り俺の方に向く。
その顔は妙に嬉しそうだった。

「今日さ、お父さん家に帰ってこないみたい」
「それって…」
「泊まり込みだね、また。…危険行為だけはするの禁止」
「分かってるって。…じゃ、行きますか？お嬢さん」
「行きましょうか……ってこんな言葉遣いやだなー」
「似合わねぇな。俺はキッドをやってきただけ有るし、こういう言

葉遣いは慣れてる」
「だよね。…じゃあ、行こう？快斗」

そう言って、青子の笑顔が俺に向けられる。
その場で鼓動が早く鳴っていたのは分かり切った事だ。
俺の前には笑顔とその笑顔の持ち主の手があった。
俺は迷わずその手を握りしめ、夜の道を歩く。

寒い風がずっと吹いていたが、俺たちの心も体も暖かいままだったのは言うまでもない。

最終・・・（前書き）

今回が最終話ですｖＶ

最終・・・

快斗の家に着いた途端、私は眠気に襲われた。

「うぅ…眠い」

「俺も眠い。助けてくれ青子」

「やだ。眠いどうしで助けてどうするのよ…寝ようか快斗」

「だな。…あー疲れた」

快斗と共に布団の中に入れば更に眠さに襲われる。

「今日はお疲れ、青子。御免な、怠いのに外に出して」

「ううん。快斗こそお疲れ様。必死になって私を守ろうとしてくれていたから…」

その言葉の後は言えない。「それに快斗に少し惚れた」とは言えない。

「お休み、青子。ゆっくり眠れな。…何かあったら言えよ？俺が何とかしてやっから」

「本当に有難う、快斗。お休み…」

その声が涙声になっていたのは秘密にしておく。

快斗への気持ちに気がついてから私はどれだけ泣き虫になったんだろう…。

何度も何度も泣いていた。

…そんな記憶が残っている。

「また、泣いてるのかよ。…ほらよ」

最低な言葉だったかもしれないけれど、それでも快斗は私を必死になって慰めてくれる。

「あ…ありがとう」

そう言って私は素直に快斗の手にあったハンカチを取り、涙を拭いた。
すぐに止まったお陰で助かったと言えば助かった。
快斗にハンカチを返した後、私は眠りについた。

眠ってしまわないとまた、泣いてしまいそうだ。
快斗に迷惑をかけっぱなしで、自分では何も出来ない。
私だって、快斗の支えをしているつもり。
快斗がどう思っているかだなんて知らないけれど、私が快斗にとって安らぎを与えてくれると想われる人になりたい。

快斗を思うと、涙が出てきたり、切なくなったりする。
もう…好きでたまらないんだ、きっと。
この世の誰よりも、貴方が好きだと言えたらどれだけ幸せか。
そんな勇気は何処にもなかったし、言えそうにもなかった。
私は言いたい事を碌に言えずに快斗と喧嘩ばかりしていた。
今更反省したって意味がないと言うことは百も承知。
だけど、言いたい事なんて山ほど有る。
今、言えないでどうするんだろう。

もう、良いや。…寝よう

そう思って眠りにつこうとしたとき、ふと思い出す。
…今日って。

「もしかして！！！」
「うぇ？青子？」

急いで布団から出て、カーテンを開く。
やっぱり、と私は呟く。
外には、何処もかけていない黄色い月。

「満月だ…」

顔にいつの間にか笑顔が出来ていた。
やっと、この日がきたんだなと思うと、嬉しかった。

「どした、青子」
「見て！！満月！」
「うわ…マジで満月だ。…でも、其れがどうかしたのか」
「…忘れたんじゃないでしょうね！」
「冗談、冗談。…伝説だろ？」
「うん。……でも」

私には幸せを手にする伝説なんて、とっくに叶ってた。
隣にいる快斗が、全てを運んできてくれたんだって。
私は元々伝説なんて信じなくても良かったのかもしれない。

「幸せは、全て快斗が運んできてくれたんじゃないかなって」
「青子…」
「青子に幸せはいらない！快斗がいたら、其れだけで十分幸せだよ！」

光の道伝説

満月の夜　好きな人と共に　満月を見ると　光の道が出てきて　永遠の幸せを手にする

幸せは此処にある。
好きな人も此処にいる。
満月の夜に確かに私は何か道のような物が見えた気がした。

でも、其れは単なる光の道。

本当の道は、此から私達が創っていく。
快斗と私が創っていけたらいいのに。

これから、どんな事が有るかは分からない。
だけど、快斗が支えになってくれる。

私も快斗が疲れていたり、怪我をしていたりすると平常心でいられなくなってしまう。
それだけ、快斗が好きだから。
誰よりも、この世の誰よりも――。

「快斗…」
「青子」

『え！？』

「かっ快斗から言って？」
「いいや、青子からだ！」

「わかった…」

そう言って一つ深呼吸をする。
もう、迷いはない。
今ちゃんと言葉に出来るんだ。

「この世の誰よりも、快斗が好き！」

私の顔は自然と笑っていた。
快斗は吃驚したような表情をした。
だけど、すぐ普通の顔に戻って

「じゃ、俺からも。……お前のこと、誰よりも大好きだ！！」

耳朶を滑る甘い言葉に流されそうになったけれど、流されても良かったのかもしれない。
だって、所謂両思いになったんだもん。

もう…何も心配しなくたって良い。

「青子。俺の前で意地になったりしなくて良いから。…弱くなって良いから。俺はお前の支えになれてるか分からないけれど、ずっと傍にいてやりたいから」
「ううん！凄く支えになってる！逆に青子の方がちゃんと支えてあげれてるのかなって…心配で」

そう言い終わった後、私は快斗の腕中へと入ってしまう。

「大丈夫だ。凄く強い支えだから。…お前に頼りっぱなしもどうか

と思うけどな」

そう言って快斗は一笑する。

「…青子は、快斗に頼りすぎて逆に迷惑をかけてるんじゃないかなって、心配なんだ。自分で何も出来ないなんて、嫌だから」

「迷惑なんてねぇよ。お前は自立できるまで、誰かの力を借りて良いんだからな。暫く俺だって青子の力、借りるかもしれない」

「ううん、快斗の役に立つなら幾らでも貸すから」

「サンキュ」

「もう…言いたい事なんて山ほど有るけど、唯一言いたかったのが此だから…」

「青子…ちょっと、目ぇ閉じろ」

「へっ？な、ななな何で？」

「良いから閉じろっ！」

「う、うん」

ゆっくりと目を閉じる。

目を閉じて１０秒ぐらいになったとき、快斗の吐息がすぐ近くで感じられた。

そして、最後に私は目を見開くほどに吃驚した。

「きっ…キスーーーーーーーーーーー！？」

「うわー恥ずい。マジで恥ずい」

「そっそんな事言うぐらいならやらなかったら良かったのに！！！」

「…でも」

『これでずっと一緒にいれるよな？』

「…うん！」

そう言って、快斗に抱きついて…。

もうこの世にこれほど幸せと思う物は　ないです。

神様　ありがとうございます。

そして――快斗。
何時も私を守ってくれて有難う
本当に心から感謝してるよ。
こんなに馬鹿で何も出来ない私だけど

一緒にいてくれる？

快斗。

Ｆｉｎ．．．

最終・・・（後書き）

今まで読んでくださって有り難うございましたｖＶ
ハッピーエンドで迎えることが出来て、私としても嬉しい限りですｗｗ
色々事件があったわけですが、結局青子と快斗は両思いで幕を閉じましたって感じで（ちょ

この連載を読んでくださった方がおられましたら、感想など頂けると嬉しいです！

ではでは！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0715d/

光の道を求めて…

2010年10月11日12時22分発行